

絵本による子どもの社会性の発達の促進

～互恵性や、多様性への寛容さを育む～

Fascilitation of the Development of Children's Sociality with Picture books

～ Depending of the Nurturing a mutually beneficial relationship and tolerance of diversity ～

吉村真理子・伊勢明子

Mariko YOSHIMURA Akiko ISE

キーワード：絵本 友だち関係 互恵性 多様性への寛容さ 保育者養成

1. 問題と目的

子どもは家庭での親やきょうだいとの関わりや保育所・幼稚園での友だちとの関わり、地域社会での大人との関わり等、多様な人との出会いや関わりの経験を積み重ねていく。しかし、少子化や都市化が進む現代の流れのなかで、きょうだいや家の近所の同年齢・異年齢の子どもと就園前に関わる機会は少なくなっている。こうした社会状況においては、保育所や幼稚園等の子どもの集団生活の場合は、子どもの社会性の発達にとって従来以上に大変重要なものとなっていると言えよう。

まだ、十分に自分の気持ちをことばで伝えることのできない3歳児も、オモチャの取り合いなどで叩いたり引っ張り合ったりしているうちに、自分の思いを通すばかりでなく、相手の気持ちに気づくようになる。また、4歳児になると相手に合わせて我慢したり譲ったりすること、つまり自己主張と自己抑制とを切り替えるセルフコントロールが少しずつ可能になってくる。さらに5歳児になり、ルールや役割分担がある遊びの楽しさを体験すると、集団への参加意欲の高まりとともに、子ども同士のコミュニケーションも深まっていき、道徳性や規範意識の芽生えを身につけていくのである。

また、幼稚園や保育所で絵本や紙芝居を読み聞かせてもらうことによって、幼児は自分の知らない物語の世界に他の友だちと一緒に浸ることができる。そして、登場人物に同一視することで不思議さや期待、感動など、さらにさまざま

な気持ちを体験することもできるのである。

この度改定された幼稚園教育要領（文部科学省,2017）のなかに、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」として、「健康な心と体」「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量・図形、文字等への関心・感覚」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」が挙げられている。

なかでも、「協同性」と「道徳性・規範意識の芽生え」については、幼児が友だちとの関わりを通して、一緒に活動する楽しさや喜び、自己主張のぶつかり合いなどによる怒り、悔しさ、寂しさ、悲しさなど、さまざまな感情を体験することによって、次第に、友だちは自分とは違う考えや気持ちを持った存在であることを理解し、その違いを受け入れ、一緒に楽しく過ごせるよう自分の行動を統制していくといった社会性の涵養に関連する項目である。

また、「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」（文部科学省,2010）において、「幼児期の終わりまでに育ってほしい幼児の具体的な姿」として、下記のような参考例が挙げられている。

「協同性」

- ・いろいろな友達と積極的にかかわり、友達の思いや考えなどを感じながら行動する。
- ・相手に分かるように伝えたり、相手の気持ちを察して自分の思いの出し方を考えたり、我慢したり、気持ちを切り替えたりしながら、わかり合う。

「道徳性・規範意識の芽生え」

- ・相手も自分も気持ちよく過ごすために、してよいことと悪いこととの区別などを考えて行動する。
- ・友達や周りの人の気持ちを理解し、思いやりをもって接する。
- ・他者の気持ちに共感したり、相手の立場から自分の行動を振り返ったりする経験を通して、相手の気持ちを大切に考えながら行動する。

保坂（1998）によると、子どもの仲間関係の発達には、外面的な同行動による一体感が重視されるギャンググループ（gang-group）、互いの類似性を言葉で確かめ合うという内面的な類似性が重視されるチャムグループ（chum-group）、内面外面共に異質性を認め、自立した個人として尊重し合うピアグループ（peer-group）と変化していくという。

いじめが問題となる小学校高学年から中学生の時期は、ギャンググループからチャムグループへと変化する時期とされ、いずれも同質性を求める特徴があるため、排他性の高い集団を形成しやすい。友人関係に対して強い親和性を求める心理過程は、揺れ動く思春期を共に乗り越え親からの健全な自立を果たすためにも重要ではあるが、一方で「中1ギャップ」と呼ばれ、児童期後期から青年期前期に激増するいじめや不登校の背景には、このような排他的な友人関係が関与しているともいえるのである。

つまり、いじめや不登校への対応といった教育現場における喫緊の課題に鑑みると、子どもたちのなかに同質性を好むがゆえに異質なものを排除しようとする傾向が存在することを再度強く意識し、幼児期から「他者の多様性への寛容さ」を子どもたちに育むという観点に基づいた保育の徹底が重要であると言えよう。すなわち、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」のなかの「協同性」や「道徳性・規範意識の芽生え」を子どもたちに培うことが求められているのである。

本研究では、絵本による子どもの社会性の発達の促進、特に互惠性や、多様性への寛容さを育む可能性について探る。

保育者養成校である短期大学の1年生に対して実施した調査結果から選出した「子どもたちに身近な人間関係について考えさせたり、人の気持ちに配慮することの大切さを伝えたりするために、子どもたちに是非読み聞かせしたい絵本」について、学生たちの選書理由をもとに、考察する。その際、幼稚園や保育所、社会福祉施設での計10週間の実習を終えた2年生の、同作品についての選書理由も挙げ、考察の一助とする。

さらに、学生が選出した上位作品に対する印象について、公立幼稚園教諭にインタビューし、その結果についても合わせて考察する。

2. 調査について

(1) 対象および時期

幼稚園教諭及び保育士養成校である短期大学の学生

1年生 146人（2017年7月）

2年生 171人（2017年2月）

(2) 内容

「子どもたちに身近な人間関係について考えさせたり、人の気持ちに配慮することの大切さを伝えたりするために、子どもたちに是非読み聞かせしたい絵本1冊とその選書理由」

(3) 結果について

表1が調査結果である。

「友だち関係」に関連した絵本を挙げた学生は146人中57人おり、挙げられた絵本は43冊であった。

上位7位までは二人以上の選択であるが、8位以下は一人選択（38冊）となっている。特定の図書に偏ることなく、学生たちが独自の感性で選書していることが伺える。

絵本による子どもの社会性の発達の促進

表1 「友だち関係」に関連した絵本

書名	作者	出版社	初版年	人数
そらまめくんのベッド	なかやみわ	福音館書店	1999	7
くれよんのくろくん	なかやみわ	童心社	2001	4
ともだちや	内田麟太郎、降矢なな	偕成社	1998	3
いつだってともだち	内田麟太郎、降矢なな	偕成社	2016	2
きつねのがっこう	いもとようこ	講談社	2016	2
ぐるんぽのようちえん	西内ミナミ、堀内誠一	福音館書店	1966	2
ごめんねともだち	内田麟太郎、降矢なな	偕成社	2001	2
あしたともだち	内田麟太郎、降矢なな	偕成社	2000	1
あたし、うそついちゃった	ローラ ランキン、せなあいこ	評論社	2013	1
いたずらねこのミロ	深見春夫	PHP 研究所	1999	1
えっと、あのね	ぺんた。	文芸社	2010	1
お月さまと王女	池田大作、ブライアン・ワイルドスミス	聖教新聞社出版局	2016	1
おともだちカレー	きむらゆういち、江川智穂	世界文化社	2012	1
おともだちになってね	岡本一郎、つちだよしはる	金の星社	1999	1
かさ さしてあげるね	はせがわせつこ、にしまさかやこ	福音館書店	1998	1
くれよんが おれたとき	かさいまり、北村裕花	くもん出版	2015	1
教室はまちがうところだ	蒔田晋治、長谷川知子	子どもの未来社	2004	1
けんかのきもち	柴田愛子、伊藤秀男	ポプラ社	2001	1
けんかのなかよしさん	あまんきみこ、長野ヒデ子	あかね書房	2007	1
コッコさんのともだち	片山健	福音館書店	1991	1
こんとあき	林明子	福音館書店	1989	1
さくらのさくひ	矢崎節夫、福原ゆきお	フレーベル館	2007	1
さっちゃんのまほうのて	たばたせいいち	偕成社	1985	1
しょんぼりしないで、ねずみくん！	ジェド ヘンリー、なかがわ ちひろ	小学館	2013	1
しんせつなともだち	方 軼羣、村山 知義、君島 久子（翻訳）	福音館書店	1987	1
そらまめくんとめだかのこ	なかやみわ	福音館書店	2000	1
だいじょうぶだよ、ゾウさん	ローレンス・ブルギニョン、 ヴァレリー・ダール、柳田邦夫	文溪堂	2005	1
たろうのおでかけ	村山 桂子、堀内 誠一	福音館書店	1966	1
たろうのともだち	村山 桂子、堀内 誠一	福音館書店	1977	1
つぎはわたしのばん	いもとようこ	金の星社	2013	1
とべないホテル	小沢昭巳、森寛子	ハート出版	1988	1
ともだち	谷川俊太郎、和田誠	玉川大学出版部	2002	1
と・も・だ・ち	ロブ・ルイス、まつかわまゆみ	評論社	2001	1
ともだちいいな	いもとようこ	岩崎書店	2002	1
ともだちからともだちへ	アンソニー・フランス、 ティファニー・ピーク、木坂 涼	理論社	2003	1
ともだちになろうよ	中川ひろたか、ひろかわさえこ	アリス館	2004	1
ともだちほしい	森山京、えがわちほ	ポプラ社	2001	1
にげにげにゃんこ	ひがしくんぺい	小学館	1994	1
にじいろのさかな	マーカス・フィスター、谷川俊太郎	講談社	1995	1
ねずみくん おおきくなったら なにになる？	なかえよしを、上野紀子	ポプラ社	2007	1
ふたりはともだち	アーノルド・ローベル、三木卓	文化出版社	1987	1
ぼくの ともだち おつきさま	アンドレ・ダーハン、きたやまようこ	講談社	1999	1
ラチとライオン	マレーク・ベロニカ、徳永康元	福音館書店	1965	1

(3) アンケート結果上位7位までの作品について

1位に挙げられたのが、「そらまめくんのベッド」(なかやみわ、福音館書店、1999)である。

そらまめくんの宝物は、雲のようにふわふわで、綿のようにやわらかいベッド。だからだれにも貸してあげません。ある日、そのだいじなベッドが突然無くなってしまったからさあ大変!そらまめくんは必死でベッドをさがしますが、どこにもありません。ところが、やっと見つけたベッドには、うずらがたまごを生んで温めていたのです。さて、そらまめくんは……。子どもたちに大人気の愉快なそらまめくんが大活躍する絵本です。(福音館書店HPより)

2位が「くれよんのくろくん」(なかやみわ、童心社、2001)である。

ある日箱から飛び出したクレヨンたち。次から次へと楽しい絵を描いていきますが、くろくんだけは出番がありません。しかし、シャープペンのおにいさんとともに素晴らしい活躍をすることに…(「Book」データベースより)

1、2位いずれも、作者はなかやみわ氏である。

同氏は、1971年埼玉県大宮市に生まれ、女子美術短大造形科グラフィックデザイン教室卒業後、企業のデザイナーとなり、その後フリーとなる。絵本については日本絵本童話美術学院にて学び、主な作品に『はりねずみのはりこ』『そらまめくんとめだかのこ』などがある。(「BOOK 著者紹介情報」より)

また、出版元である福音館書店の作者紹介は、下記の通りとなっている。

キャラクター会社に勤めていた作者のなかやみわさんは、ぐりとぐらを始めとするいつまでも古さを感じさせずに子どもたちに親しまれ続ける絵本のキャラクターと、最初の表紙から最後の裏表紙まで、自由に自分の世界を持って表現できる「絵本」そのものに強く惹かれ、会社を辞めて絵本の勉強を始めました。この物語の主人公であるそらまめくんは、ある時なかやさんのお母さんが大量に買ってきたそら豆に着想を得て誕生したそうです。決してお利口さんではない、等身大の感性をもったそらまめくんが多くの子どもたちの心をわしづかみにし、空前

の大ヒット作となりました。そらまめくんが活躍する絵本は、他に『そらまめくんとめだかのこ』が現在「こどものとも絵本」として刊行されています。

3位は「ともだちや」(内田麟太郎・降矢なな、偕成社、1998)である。

「ともだちや」を始めることを思いついた寂しがりやのキツネ。1時間100円で友だちになってあげようというのだ。でも、その商売もなかなかうまくいかない。そんな時、「トランプの相手をしろ」と声をかけてきたのはオオカミ。トランプの後にキツネがお代を請求すると、オオカミは目をとがらせた。「お、お前は、友だちから金を取るのか。それが本当の友だちか」(「偕成社」HPより)

4位は「いつだってともだち」(内田麟太郎・降矢なな、偕成社、2016)である。

近頃とっても変なオオカミさん。キツネは遊びたいのに、オオカミさんは居眠りばかり。クマさんもイノシシさんもヘビさんも、遊ぼって言っても皆ダメっていう。キツネは独りぼっちになった気分。でも、オオカミさんが考えていたことは、とびきり素敵なことでした。だって大事な友だち、キツネの誕生日だったのですから! (「amazon 内容紹介」より)

3、4位いずれも、作者は内田麟太郎・降矢ななの両氏であり、オオカミとキツネの人気シリーズとなっている。

内田麟太郎氏は、1941年福岡県大牟田市に生まれる。作品は、『さかさまライオン』第9回絵本にっぽん賞、『がたごとがたごと』第5回日本絵本賞(以上童心社)、『うそつきのつき』小学館児童出版文化賞(文溪堂)、『ぼくたちはなく』第15回三越左千夫賞(PHP研究所)など受賞作品が多数ある。

降矢なな氏は、1961年東京に生まれ、スロヴァキア共和国のブラチスラヴァ美術大学版画科を卒業している。和洋両方の味を合わせもつ独特な画風である。(両氏ともに「BOOK 著者紹介情報」より)

5位は「きつねのがっこう」(いもとようこ、講談社、2016)である。

ある日、大切なものを落として、きつねのがっ

絵本による子どもの社会性の発達の促進

こうにやってきた人間の男の子。その学校で学んだことは……？ 新作ではずっと考えていたというスマホと人間との関わりについて取り上げています。（「amazon 内容紹介」より）

5位の作者いもとようこ氏は、兵庫県に生まれ、金沢美術工芸大学油画科を卒業している。『ねこの絵本』（講談社）、『そぼのはなさいたひ』（佼成出版社）で、ボローニャ国際児童図書展エルバ賞を2年連続受賞しており、『いもとようこうたの絵本1』（講談社）では、同展グラフィック賞も受賞している。（「BOOK 著者紹介情報」より）

6位は「ぐるんぱのようちえん」（西内ミナミ・堀内誠一、福音館書店 1966）である。

ぐるんぱは、独りぼっちの大きなゾウです。ビスケットやさん、靴屋さん、ピアノ工場、自動車工場……。ぐるんぱは、いろいろな仕事場で一生懸命に働きますが、作る物が大きすぎて失敗ばかり。そんなときぐるんぱは、子どもがたくさんいるお母さんに出会います。子どもたちの世話を頼まれたぐるんぱは、とても素敵なものを作ります。それはぐるんぱが作った大きな物でたくさん子どもたちが遊べる、素敵な幼稚園でした。（「福音館書店」HPより）

6位の作者である西内ミナミ氏は、京都に生まれ、瀬戸内海・東北地方や東京で育つ。東京女子大学在学中からサークル活動で児童文学創作を志すが、卒業後は広告会社にコピーライターとして約10年間勤務する。堀内誠一氏の勧めにより、初めての絵本『ぐるんぱのようちえん』を書く。他の作品には『おもいついたらそのときに！』（こぐま社）、『しっこっこ』（偕成社）、『ゆうちゃんとめんどくさいサイ』（福音館書店）などがあり、幼年童話も多数発表している。

堀内誠一氏は、戦後、弱冠14歳にして伊勢丹百貨店の宣伝課へ入社し、装飾係員としてウィンドウディスプレイや展覧会、PR誌「ブーケ」の制作に携わり、早熟な才能を開花させた。約10年間勤務した後、広告デザイン会社アド・センターの設立に参加し、本格的にデザインの仕事を始め、その後、さまざまな雑誌のアートディレクションやロゴデザイン、絵本の挿画を

手がけ、絵本作家としても活躍した。（両氏ともに「BOOK 著者紹介情報」より）

また、出版元である福音館書店の作者紹介は、下記の通りとなっている。

お店を転々として職業を変える不器用な象のぐるんぱには、当時26歳でコピーライターとして事務所を転々としていた作者の西内ミナミさんの姿が投影されている。絵本なんて全く知らなかったという西内さんが象の中でもさらに大きい象のお話を書こうと思って一晩で書き上げたお話に、「an・an」や「POPEYE」、「BRUTUS」などの雑誌のロゴを手がけられた堀内誠一さんが、一気に絵を描き上げて、稀代の名作が完成した。

7位は、3、4位にも登場した内田麟太郎・降矢なな両氏による「ごめんねともだち」（内田麟太郎・降矢なな、偕成社、2001）である。

オオカミはキツネと初めてのうげんか。仲直りしたいのに、あの一言が出てきません。「ごめんね」って。心の中なら言えるのに。（「amazon 内容紹介」より）

3. 上位作品に対する学生の選書理由

1位、2位に選出されたなかやみわ氏の「そらまめくんのベッド」および「くれよんのくろくん」について、それぞれ学生の選書理由を記し、子どもたちに、互惠性や、多様性への寛容さを育む可能性について考察する。なお、回答については、趣旨は変えず、常体表記とし、文末表現のみ修正したものもある。

「そらまめくんのベッド」

○人は、人に優しくすることで信頼関係が生まれるので、人に優しく接すると自分にも優しさが返ってくることを伝えたい。

○そらまめくんのふかふかのベッドをめぐり、友だちの優しさがわかるお話。そらまめくんのベッドを読んで、友達に優しくした分だけその優しさは自分に返ってくるということを伝えたい。他人を思いやる気持ちを最初は持てなかったそらまめくんだが、卵がかえったときうずらのお母さんに感謝されたような気がしたり、他の豆たちのそらまめくんを心配してくれた心の

温かさを知ったりすることによって、そらまめくんが他人を思いやる気持ちを持つことができたという姿から、子どもたちにも何かを学んでほしい。人は人に優しくすることで、信頼関係が生まれていくので、人に優しく接すると自分にもその優しさが返ってくることを伝えたい。

○そらまめくんが誰にも貸したくないくらい大切にしているベッドが無くなってしまったことをきっかけに、うずらのお母さんにベッドを貸してあげるという場面から、友だちを思いやることの大切さ、さらに相手を思いやることで自分もうれしい気持ちになれるということを伝えたい。友だちにおもちゃなどを貸してというのも勇気がいるが、自分がとても大切にしている物を貸すのは、もっと勇気がいると思う。相手を思いやり、ベッドを貸してあげたそらまめくんの勇気を、子どもたちに感じてほしい。思いやりを子どもたちが理解するのは難しいが、自分の大切なもの、お友だちという身近な設定なので、子どもたちにもわかりやすいと思う。

○そらまめくんは、自分の大きなベッドがお気に入り。誰にも貸したくありません。お友だちに貸してと言われますが貸しません。でも、困っている友だちのために最後は貸します。この本で、友だちへの優しさや、困った人を助けられる心を持つことが大切だよということを伝えたい。

○人に優しくしないで意地悪をすると、自分も人から意地悪をされる。人に優しくすると、人からも優しくされる。独占して物を使うのではなくみんなで使う。相手の気持ちを考えながら頼みごとをすることの大切さを伝えたい。

○自分のお気に入りの物があっても、独り占めしないで皆で一緒に使えばもっと楽しくなるというような譲り合いや協調性の大切さを伝えたい。

○そらまめくんは宝物であるベッドを友だちが貸してといっても貸してあげなかったのに、その大切なベッドが無くなってしまったとき、友だちは自分のベッドを貸してくれようとした。自分のベッドは、鳥が卵をかえすのに使っていたことに気づいたそらまめくんは貸してあげることにしたというお話。そらまめくんは、自分

のベッドで無事にうずらの赤ちゃんが生まれ、お母さんとあかちゃんが並んで帰って行くときにお母さんから感謝されているように感じ、役に立てて本当に良かったと思い、良いことをすると自分も気持ちが良くなることに気づく。この絵本を通して、子どもたちにゆずり合う心や思いやり、優しさ、人の役に立ち感謝されると心が温かくなるということ、人と人との繋がりは大切であり助け合っていくべきだということを伝えたい。

学生の選書理由には、友だちへの優しさ、譲り合い、思いやり、相手を思いやることで自分もうれしい気持ちになるなど、子どもに互いを思いやることの大切さを感じとってほしいというものが多くみられる。また、「意地悪をすれば意地悪される」「人に優しくすると人からも優しくされる」「友だちに優しくする分だけ優しさは自分に返ってくる」等、「互惠性」に言及しているものも多い。

「情けは人のためならず」という諺があるが、ある個体が利他行動（他者に親切にする行動）を行った結果、その個体の評価が高まり、他者に行った利他行動が回り回って別の第三者から返ってくる仕組みのことを、「社会間接互惠性」という。清水・大西（2013）によると、5、6歳児の段階で、すでに他者間のやり取りから他者の評価を形成し、親切な者にはより親切に振る舞う」という傾向があり、これは社会間接互惠性の成立にとって最も重要なルールとされる。また、他者に親切にしない者には親切にしない（もしくは罰を与える）というルールなども諸研究によって見出されているという。さらに、親切な子に対しては、その様子を観察していた幼児が「体に触れる」「肯定的な内容で話しかける」「自分の持っている物を見せる」などの親和行動をとるということも見出されている。

「そらまめくんのベッド」の後半では、下記の通り、ベッドを貸してくれたそらまめくんに対するうずらのお母さんの姿が、文・絵ともに印象的に描かれている。同作品の読み聞かせをしてもらった子どもたちは、おそらくそらまめくんに同一視し、人の役に立つことができた

絵本による子どもの社会性の発達の促進

いう疑似体験のできる場面であろう。実際に親切な子の様子を観察するのと同様の効果が期待できると言えよう。

「げんきでね」そらまめくんがてをふると、おかあさんうずらはふりかえって、そらまめくんをじっとみつめました。

「くれよんのくろくん」

○くれよんにいろいろな色があるように、人にもそれぞれ個性があって、輪になかなか入れない子や暴れん坊な子はちょっと接しにくいかもしれない。でも、あの子はちょっと変わっているからと思っても、もしかしたらすぐく勇気がある子かもしれない。見た目では分からないこともあるから、自分から積極的に友だちと関わってほしいということを伝えたい。

○どんな子でもみんな自分とは違う性格で、いいところもある。でもだからこそ、くれよんたちのように、誰も見捨てずに、仲良くしてほしい。困っている子がいたら、シャープペンのような人になってほしい。

○皆の持っているいろいろな個性を発揮してほしい。くろくんのように短所を長所に変え、さらに皆の個性を生かし皆で作り上げていく協調性や団結力の大切さを伝え、仲間はずれやいじめをしない子どもになってほしい。

○くれよんのくろくんは他のクレヨンより目立たない存在だったため、色ぬり、お絵描きにあまり参加できず、悲しい気持ちでいた。しかし、くろくんにはくろくんにしかできないことがあり、みんなの中に入れた。このように誰にもできないこともあれば、その人にしかできないこともあるから自信を持ってほしいと伝えたい。

学生の選書理由には、自分とは違う性格の子がいることや人にはその人しかできないことがあることを理解してほしい、人それぞれの個性を認めてほしい、自分に自信を持ってほしい、見た目では判断せず積極的に友だちと関わってほしいなど、「他者の多様性への寛容」に対する言及が多い。

シャープペンのお兄さんの「いろいろな色で塗り散らかした絵を、その上から黒一色で塗り

つぶし、とがったペン先で引っかいて色とりどりの花火を描く」という行動は、子どもたちにとっては予想もできない発想の転換と言える。幼児は心から「すごい」と思える体験をすると、それまでの他者を見る固定観念が劇的に変わり、それまでの思いこみが払拭されることも多い(吉村・上田, 2017)。中島・稲垣(2007)は、このような幼児に見られる「他者は容易に良い方向へと変化するものだ」と考える傾向を、「素朴楽天主義」と呼んでいる。このような幼児の易変性を考えても、その子の良さを皆が認める場を創出することこそ、保育者の役割であると言える。

また、「そらまめくんのベッド」における「互恵性」についての理解と同様、「くれよんのくろくん」における「他者の多様性への寛容さ」についても、子どもたちは、絵本の世界に入り込み友だち同士の葛藤場面を疑似体験することで、行動変容が促される可能性があると言える。

4. 同作品に関する2年生の選書理由

幼稚園や保育所、社会福祉施設での計10週間の実習を終えた2年生の、同作品についての読み聞かせをしたい理由は以下のとおりである。なお、回答については、趣旨は変えず、常体表記とし、文末表現のみ修正したものもある。

「そらまめくんのベッド」

○貸してくれなかったから自分も貸さないとなりそうなのに、貸してあげるという友だちの優しさを子どもたちにも伝えたい。自分が貸してもらえない立場だったらどういう気持ちになるのかがわかるのではないかな。

○うずらのお母さんにベッドを使われてしまったとき「卵を温めているなら仕方ないか・・・」というようにそらまめくんの気持ちが変わっていったのは、相手の気持ちを考えてみたからだと思う。それまでは、自分のことしか考えられなかったのに、相手がどういう状況であるか、どうしたいかをわかるようになったという成長が描かれている。

○そらまめくんは大切な宝物のベッドが無く

なってしまう、どこにあるか友だちに問いかけても皆知らないと言うだけで探すのを手伝ってくれない。友だちがそらまめくんのベッドに寝てみたいと言ったとき「いいよ。」と言っていければ、きっと探すのを手伝ってくれたと思う。読み終わった後に、どうしてそらまめくんの友だちはベッドが無くなったときにすぐ探してくれなかったのかな？友だちに優しくすることで、自分が困ったときに手助けしてくれたことがあるかな？と問いかけることで、子どもたち自身が思いやりについて考えることができる。

○「独占せず、友だちと一緒に使う、貸す」という大切なことが学べると思う。「貸して。」という方も「いいよ。」という方にも勇気が必要だが、そのコミュニケーションが上手に取れるようになると良い関係が築いていけるのではないか。

「くれよんのくろくん」

○皆から仲間はずれにされてしまう黒くんだが、最後には素晴らしい活躍を見せる。個性が強いと仲間はずれにされがちだが、個性というのは十人十色で、皆違って皆良い。そして協力し合えば素敵なものができるという気づき、仲間はずれは良くないということを伝えたい。

○クレヨンたちのように、黒くんを黒だから使えないと見た目だけで仲間はずれにしないでほしいということを伝えたい。この世の中に必要のないものなんてないということを理解してほしい。この絵本を読んだ後、黒をあまり使わなかった子も使うようになるのではないか。とてもメッセージ性が強く、子どもの頃は何気なく読んでいたが、これから保育者になろうという時に読むと良いお話。

○このお話では、一箱のクレヨンたちが出てくる。それぞれのクレヨンは性格も違ってまるで保育所や幼稚園のクラスのようなのである。クレヨンたちが紙に絵を描いて遊び始めるが、黒くんは入れてもらえない。黒という色が可愛い色ではないからである。この姿は、保育所や幼稚園で、何かをするのが上手ではないからといって遊びに入れてもらえない子どもの姿と重なる。最後には、シャープペンシルのお兄さん

のお陰で、黒という色の大切さや素晴らしさを他のクレヨンたちに知ってもらうことができる。クレヨンたちもどの色も素敵でそれぞれ得意なことがあるということに気づく。私のなかでは、シャープペンシルのお兄さんは保育者で、遊びに入れてもらえない子どもの良いところや得意なところに気づき、それを他の子どもたちに伝えていように見える。子どもたち一人ひとりが素敵な存在だということを知り、人の気持ちを考えて遊ぶようになってほしい。

○黒くん以外のクレヨンたちが好きなように絵を描くなか、一人仲間はずれにされて落ち込む黒くんに、シャープペンシルのお兄さんが黒くんにしかできないことを教えてあげて元気になる場面や、最後に皆で楽しく遊ぶ場面から、皆それぞれに個性や良い所があるということ、相手を思いやる大切さなどを自然に学ぶことができるのではないか。

○クレヨンは子どもたちにとって身近な道具なので、クレヨンの気持ちになってもらいたい。始めはいじめられていた黒くんも、最後は皆に認めてもらうことができ、綺麗な作品が完成した。黒くんは皆が思っているような子ではないと、皆が後から気づく場面もあり、とても良い。

10 週間の実習を体験した 2 年生は、実際に子どもたちを目の前にしてこの絵本を読み聞かせたら、そのような反応が返ってくるだろうというように、子どもたちの反応を予測しながら記述している。

特に「くれよんのくろくん」についての記述に関しては、クレヨンという素材の持つ親近感に気づいたり、登場するクレヨンやシャープペンシルを保育所や幼稚園の子どもたちや保育者に置き換えて考えたりするなど、保育者としての立場に立って考察する姿勢が伺える。当然ながら改めて実習の教育効果は非常に大きいと言える。

5. 上位作品に対する保育者の印象

公立幼稚園教諭 4 名に「そらまめくんのベッド」及び「くれよんのくろくん」について、保育者を対象とし、勤務経験年数 40 年（私立幼

絵本による子どもの社会性の発達の促進

稚園2年、公立幼稚園38年)の元幼稚園教諭が、一人5分程度のインタビューを行った。その後、座談会形式で同内容について聴取した。

インタビューの内容は、「この本を読んだ時にどう感じましたか」「日頃、友だち関係について考えさせるために、この本を保育の中で読み聞かせていますか」である。

4人のインタビュー結果をまとめると以下のようになる。

① A 教諭 (30 代後半・女性)

「くれよんのくろくん」

相手の気持ちになって考えてほしいと思ったから。とても真剣な表情でみてくれた。「くろくんがかわいそう」などの声が聞かれた。

相手がどう思うのかというのは言葉だけではあまり伝わらないのではないか。絵本の世界に入って、いろいろな気持ちになったり、感じたりしてくれたらと思う。

② B 教諭 (30 代前半・女性)

「そらまめくんのベッド」

友だちに優しくされることの嬉しさ、心の温かさ、皆で思いを共有する喜びを伝えられる。「くれよんのくろくん」

皆で協力する楽しさ、皆で一つのことをする喜びを伝えられる。

③ C 教諭 (20 代後半・男性)

「そらまめくんのベッド」

自分の大切なものを貸してあげる姿を子どもに見せたい。とても読みやすく、絵のフワフワ感が好き。そらまめくんの友だちの表情や家の感じが面白い。

「くれよんのくろくん」

ストーリーが面白い。他の色に断られ悲しむくろくんに対して、子どもたちから「かわいそう」「最後どうなるの」。みんなに認められる姿に「よかったね」、くろくんが短くなっていることに対して「可哀そう」などの声が聞かれた。

④ D 教諭 (40 代前半・女性)

「そらまめくんのベッド」

絵がとても優しく、見ていて優しい気持ちになる。そらまめくんシリーズはいろいろな豆が

出てきて、最初は意地悪もするが最後は仲間に優しくするところが良い。

2冊の絵本についてそれぞれまとめると、以下のようになる。

「そらまめくんのベッド」

どの保育者も保育の中で取り上げている絵本の一冊である。

感想は「相手の気持ちになって考えてほしい」「友だちに優しくされることの嬉しさ、温かさを感じてほしい」「絵の優しい感触がいい」「思いを共有する喜びを伝えたい」といったものが多い。

「くれよんのくろくん」

皆で協力する楽しさ、一つのことをする喜びを味わってほしい、いろいろな気持ちになって絵本の世界に入り込んでくれたらという考えがあった。

保育者は、子どもたちに絵本を環境として与え、日々の実践の中でほぼ毎日読み聞かせを行っており、絵本に表現されている絵の面白さや温かさ、言葉の面白さや響き、楽しさなどを、子どもたちそれぞれに自由に感じ取らせていく。また、登場人物の気持ちと同一視する過程を大切にし、子どもたちが感情を素直に出せるよう導いていっている。つまり、担任しているクラス子どもたちには、それまでに絵本を通して経験した多くの感情や思考の蓄積があるのである。子どもたちが日頃の生活のなかでいろいろな場面に遭遇した際に、その蓄積のなかからその時に必要な感情や思考といった経験を取り出し、自身の助けとしてほしいという、保育者の願いが伝わるインタビューであった。

7. まとめと今後の課題

いじめや不登校、特別支援教育といった教育・保育の現場での喫緊の課題に対処していくためにも、幼児期の子どもたちが絵本の世界に入り込み、主人公に同一視し友だち同士の葛藤場面を疑似体験するなかで、「協同性」や「道徳性・規範意識の芽生え」について深く考え、「互恵性」や「他者の多様性への寛容」という観点を自身

の内に育てていくことが重要である。

幼稚園教諭及び保育士養成校である短期大学の学生に人気のあるなかやみわ氏の作品「そらまめくんのベッド」や「くれよんのくろくん」は、子どもたちに互惠性や、多様性への寛容さを育むことのできる絵本と言えよう。

「くれよんのくろくん」については、オペレッタ作品化されており、生活発表会などで演じられている。ロールプレイング（役割演技）のように、実際に身体で演じることで得られる実感の効果も大きいことが予想される。絵本の読み聞かせを通して、主人公に同一視し葛藤場面を疑似体験することとの比較も興味深い。

本学においては、現在、読書推進活動を担う人材養成の一環として、初等コースの学生は「学校図書館司書教諭」資格を取得することができる。2018年度から保育コースの学生にも、絵本の魅力と可能性を伝える絵本のスペシャリストである「絵本専門士」の前提資格である「認定絵本土」を取得できる養成課程を設置（試行）する予定である。

今後も、子どもの社会性の発達に關する絵本活用の可能性について、さらに研究を行っていきたいと考える。

〔参考文献〕

- ・保坂亨 1998 児童期・思春期の発達 下山晴彦（編）教育心理学2 発達と臨床援助の心理学 東京大学出版会 pp.103-123
- ・いもとようこ 2016 きつねのがっこう 講談社
- ・中島伸子・稲垣佳世子 2007 子どもの楽天主義～望ましくない特性の変容可能性についての信念の発達～ 新潟大学教育人間科学部紀要人文・社会科学編 第9号 pp.229-240
- ・なかやみわ 1999 そらまめくんのベッド 福音館書店
- ・なかやみわ 2001 くれよんのくろくん 童心社
- ・西内ミナミ・堀内誠一 1996 ぐるんぱのようちえん 福音館書店
- ・清水真由子・大西賢治 2013 「情けは人の為ならず」を科学的に実証 最新研究成果リ

リース 大阪大学 HP

- ・内田麟太郎・降矢なな 1998 ともだちや偕成社
- ・内田麟太郎・降矢なな 2001 ごめんねともだち 偕成社
- ・内田麟太郎・降矢なな 2016 いつだってともだち 偕成社
- ・吉村真理子・上田和美 2017 構成的グループエンカウンター活用の試み～子どもたちが互いの良さを認め合う保育～ 千葉敬愛短期大学研究紀要 第39号 pp.205-213